堀辰雄

近代作家研究叢書71

堀辰雄

魂の遍歴として

江苏工业学院图书馆
藏书章

監修／吉田精一

吉村貞司著

解説／池内輝雄

日本図書センター

近代作家研究叢書71　監修・吉田精一

堀　辰雄　魂の遍歴として

1989年10月15日印刷
1989年10月25日発行

著　者　吉村貞司

解説者　池内輝雄

発行者　高野義夫

印刷所　モリモト印刷株式会社

製本所　有限会社東明製本

発行所　株式会社日本図書センター
東京都文京区大塚3－4－13
電話03(947)9387　振替東京2-8206

落丁・乱丁本はおとりかえします。　**定価5,150円**(本体5,000円)

目次

凡例

堀辰雄

解説　池内輝雄

吉村貞司著

凡　例

1. 本叢書は、日本の近代作家についての研究・評論・回想・伝記などの著作・資料を復刻（影印）叢刊する。
2. 底本は、原則として初刊本により、場合によっては、改訂版・増補版等に拠る。また、復刻にあたって新たに増補または改訂を行なった場合は、凡例にその旨明記する。
3. 原則として底本の扉から奥付、奥付につづいて書籍の広告等のあるものは、同広告までを収める。
4. 装丁は叢書版として統一する。
5. 解説は、原本の書誌的な紹介を行ない、本論では、当該作家の研究を史的にふまえた上で同書刊行または所収論文初出時点での同書のもった意義、あるいは今日的視点からの評価その他におよぶ。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

堀辰雄

魂の遍歴として

吉村貞司著

東京選書 8

本書は、東京ライフ社（東京都千代田区神田三崎町二）より〈東京選書〉シリーズの一冊（第8冊）として、昭和三十年（一九五五）七月十五日刊行された。私の手元にはその第二刷本があるが、発行は同年の八月一日、わずか二週の間に増刷になっており、本書が当時の読者にいかに好評をもって受け入れられたかがわかる。当時「日本図書館協会選定図書」の指定も受けている。

まず本書の体裁等について触れておこう。

題名は表紙カバーおよび扉に『堀辰雄魂の遍歴として』、奥付に『堀辰雄　魂の遍歴として』とある。判型は縦一七・五センチ、横一〇・五センチ、いわゆる新書判である。表紙カバーは三色刷りで、若い女性の立ち姿を描いた一枚の版画（アンリ・マチス画）を表・裏（ただし裏は淡彩）に掲げている。またカバー下部は帯様に印刷され、そこに亀井勝一郎の「堀文学の中核である西欧文学の追究と愛と死の探求〔?〕これを明らかにしたところにこの本の成果がある」という推薦文が印刷されている。カバーの表紙表側折返しには蒲池歓一著『伊藤整』について四百字ほどの「伊藤整氏の読後感」が付けられ、同裏側には、「東京通信」と題するこのシリーズの発刊意図と思われる文章が次のように載せられている。

序

推薦のことば

亀井勝一郎

吉村貞司君の「堀辰雄」には、二つの重要な面が語られてゐる。そのひとつは西歐の文學に魅せられつゝ、これを日本の土壤に移さうとしたときの一種の混血美の追究である。堀文學のさういふ面が、青年時代から、どのやうなかたちで進行したかを、詳にして、そこに一つの典型を打ち出さうとしてゐる。もうひとつは、「死」を絶えずみつめながら、このきびしい限定の裡に成育してゆく愛のすがたの探求である。どちらも堀文學の中核をなしてゐるが、それが同時に現代文學の、また人間についての、普遍的な問題であることを、それとなくあきらかにした點に、この本の成果があると云つてよからう。眞劍に克明に勉强したあとがよくうかゞはれる。

昭和三十年七月一日

みつぶされ、抹殺される困難とたゝかひながら、みごとに自分の文學の道をつらぬいた。さうだ、もし彼が、たゞ海外文學の新しさを求めて、新作家をあさりつゞけ、又は方法の新しさを利してアクロバットみたいな藝におちこんだならば、つとに忘れられた小說家になつてしまつてゐたであらう。彼は方法論が、單なる技巧ではなく、世界形成のための目、人間把握のための手であることを知つてゐた。コクトオ、ラジィケ、プルウスト、リルケ、カロッサ、モオリアックと作家の間を遍歷した彼は、彼等西歐作家に、人間とは何か、愛とは、死とは何かと問うてやまなかつた。

堀辰雄はガラス張りの仕事部屋に、讀者を招待して、自分の方法論を、創作の正しい理解を求めてやまなかつた。ところが、彼は今日でもいぜんとして、詩的な抒情作家、甘美な感傷作家、更につけ加へるならば、デッサンを無視した筋のない作品の作家だとされてゐる。彼が理解してもらひたいことは、ほとんど失敗に歸したといつてもいゝ。それは彼の解說の失敗といふより、わが國の文化が二十世紀の世界文學さへ不消化のまゝでゐることに責任の大半があらう。

この小著では、できるだけ堀辰雄のガラス張りの仕事部屋に案內するやうに心がけた。そこは世界文學のきびしい嵐のふきすさぶ所である。そのきびしさの中で、堀辰雄の眞意をあかし、同時に文學といふ名だけは同じでも、內容はすつかり變質した二十世紀文學の考へ方に親しんでいたゞきたいと希ふためである。

昭和三十年七月一日

著者しるす

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

目次

序　亀井勝一郎
自序
出發……一
立原道造の反逆（一一）　コクトオの文學革命（一四）　階級意識の惱みの世代に（一八）
堀辰雄の風土（二二）　芥川龍之介と（二四）
聖家族……二九
室生犀星への訣別・レムブラント光線とジイド（二九）　映畫の本質（三五）　「聖家族」とラジィケ的方法（四二）
美しい村……四九
プルウストの凝視（四九）　恢復期・麥藁帽子（五三）　美しい村と失戀（五六）　苦惱の癒やしとしての牧歌（五九）　愛の純粹さについて（六四）
風立ちぬ……六九

「四季」の世界文學意識（六九）　死の近さ（七一）　ハイデッガーの顚落の時間（七六）
永遠の戀人（八〇）　愛と死のたゝかひ（八三）　救ひとしての文學（八八）

死のかげの谷……九四
死の成熟（九四）　リルケの鎭魂曲（九七）　死者の幸福（一〇〇）

かげろふの日記……一〇三
リルケの女性觀のもとに（一〇三）　堀辰雄の發展（一〇九）　魔神對リルケ（一一三）　ほ
ととぎす・運命と惡靈の女（一一九）

幼年時代……一二七
生の危機における幼年の意義（一二七）　永遠の告白者としてのカロッサ（一二九）　花を持
てる女・過去との和解（一三二）

姨捨……一三五
永遠の女性（一三五）　フローラとフォーナ（一三八）　小品「更科日記」の價値（一三九）
姨捨における戀（一四四）　信濃への招待の意味（一四八）

榮穗子……一五一
小說に対する老へ方の變化（一五一）　モオリアック對プルウスト（一五六）　物語の女（一
六〇）　榮穗子執筆前なぜ行きつまつたか（一六五）　榮穗子の性格における魂の飢渴（一六

五）　都築明の放浪の意味（一七〇）　男性の本質（一七二）　危機と天使（一七六）　明の人生目的（一七九）　結末の弱さ（一八二）　楡の家第二部（一八三）

古墳……一八六

死の觀念の成熟（一八六）　リルケと萬葉における死（一八八）　自然科學的死生觀に抗して（一九一）　曠野（一九三）　折口信夫・フレザァ（一九八）　落日と彼の死（二〇〇）

略年譜……二〇三

出發

堀辰雄は立原道造の墓前に小さな「堀辰雄詩集」をさゝげたときに、かう書いた。

「――君はどんなにか喜んだらう、去年の春、君の墓の前に、深澤紅子さんが一本の美しい薔薇の木を手づから植ゑられたのを。が、今はどんなにか氣にしてゐるだらうか、その薔薇の木がそれから一年も立たぬのにもう少し枯れかゝつてきてゐるらしいのを。」

その詩集といふのは、立原が堀辰雄の青春時代の「卽興的に作つた」「今日までに書くことの出來た詩の全部」でもある三つの詩を丹念に筆寫して、灰色の表紙をつけて小さな冊子にしたてておいたものである。それを墓前にそなへるために印刷にした。深澤紅子に生前の立原が好きだつた村だの、草花だの小鳥だのを画きそへてもらつた詩集である。堀辰雄には自分自身の「少年時の夢の實現した」だけのものなら、役にも立たないし、意義のないものにすぎなかつた。それはひたすら、夭折した立原の生前の夢を活字にして見せて、あたかも花やいだ季節に墓をかざる

薔薇でも植ゑたやうに、なき人の魂をなぐさめるためのものであつた。

しかし、堀辰雄と立原道造の師弟關係の間にあつて、それらの詩篇は特別の意味をもつてゐたにちがひない。なぜかと言へば、立原が書いた堀辰雄論である評論「風立ちぬ」の最初にとりあげられてゐたから。立原の「風立ちぬ」論は、作家としての堀の本質を論じながら、師である堀に對して反逆を宣言した、切ない悲しみと生命感にあふれたものである。

言ふまでもないことだが、文學には師もなければ、友もないのだ。誰かがみちびき、誰かが教へてくれる、そんな生やさしい世界ではないのだ。作家は自分の作品とともにあるほかは、孤獨にとじこめられる。彼が名聲を得たらと反駁する人があるかもしれない。しかし名聲とは、リルケが言ふやうに、「新しい名前のまはりに集るあらゆる誤解の精髄(エキス)」にすぎないのだ。もし誤解のあつい層をくひやぶつて、作品の眞實に肉迫するものがあつたら、彼は作品に屈服するか、否かを問はれる。いさゝか不逞な表現を弄するならば、一つの作品にさゝげられる共鳴や尊敬は、さゝげる人たちの魂に對する作家の勝利であらう。もちろん、こゝで言つてるのは通俗(ヴァルガア)な作品についてではない。通俗な作品には常識だけしかない。常識が常識の世界に對して、たくみにストーリーを語つて見せる。それは魂のいとなみから絶緣された娯樂にすぎない。娯樂とは過ぎて行くもの、過ぎてしまつたら、あとかたもなくなつてしまふ消費にすぎない。私がこゝで問題にしてゐるのは、作品の力で讀者の魂をとりこにしてしまふ作家、讀者の宇宙を一擧にひつくりかへ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com